

胎ス故ニ此谿谷ニ就キ稍精細ナル検査ヲ施スコト  
復タ歎ケ可ラザルニ要歟トス。是ヲ以テ附錄(第一)ニ左  
側谿谷逐一ノ状ヲ説明ス

胚胎。はいがる。

右、俱支川ノ事

山ヨリ流レテ東ル其長二十里アリト云ヘリ。此川ノ一支ヲ  
裕尾川ト号ケ烏帽子山ヨリ出ツ。イヤニ川ハ飛流急湍ヲナ  
シ終ニ吉野川ニ入ル其濁又スル所ハ川口村ヨリ一里許ノ下  
流ニ於テス。漱口ニハ燧石岩片ヲ混スル砾質ノ大礦洲アリ  
壁ヒ艸木山地ニ繁茂スルト虽猶自然ノ滲蝕欠崩並ニ切一畠  
耕作ニ由テ以テ磧碍トナルベキ物質多少ヲ流逝ス  
谷ヲ谷及ヒ中村谷、此両谷ハ池田村ノ下ニ在リ清水ヲ流出ス

著しい被害を吉野川に発生させる原因は主として、この渓谷群よりはじまる。それ故に、この渓谷について詳細な調査をすることは、欠かすことの出来ない要点である。そのためには、附録第一には左岸の渓谷について詳しい説明をした。

—右側支川のこと—

〔祖谷川〕祖谷川は、銅山川に次ぐ大きな支流である。直流して劍山より流れ出る。その長さは二〇里あるという。この川の一支部を松尾川と呼び、烏帽子山から流れ出す。祖谷川は非常な急流で吉野川に流れ込む。その合流点は川口（川口）より一里ばかり下流である。合流点には燧石岩片の混じった礫質の大砂州がある。たとえ草木繁茂の山地であっても、自然の浸食崩壊、及び切畑（焼畑）耕作によつて、〔河川の〕障害となるべき物質を多少流し込んでいる。

## 【ハチウ谷及び中村谷】<sup>※2</sup>ハ

清澄な谷水を流出している。

【井ノ内谷（井ノ内谷川）】井ノ内谷は瀧宮に向かい合つてゐる。井ノ内山より流れ出し、長さ三里である。その水は清流で、干ばつにも、なお一秒間に一〇立方尺前後の水量を絶やさない。

※ 1 燐石 ヒュチイシ

※2 ハチウ谷

※3 瀧宮

量十立方尺内外ノ水ヲ絶タズ

深谷及金川谷両ナカラ加茂野山ヨリ出テ矩ニ溪流ヲナス水

皆看登ナリ

加茂野山谷 加茂野山谷ハ長三里アリ烏帽子山及ヒ西野山

下部ノ水皆之ニ疏ス・山地艸木ノ生育較佳ナリ。

流線ノ下方確ノ乾床幅二十間ノ所アリ夫ヨリ稍上流ニ於

テ水ヲ引去シ以テ三個村ノ田園灌溉ノ用ニ供セリ。

山口谷・中ノ庄村ニ在リ其長ニ里アリ・中ノ庄村ヨリ出ツ。

此溪流ハ砂礫ニ成レル川床、幅十間乃至十五間ニシテ平常

乾涸ナル看ヲ有ス。濱口ハ左側川内谷ヨリ流送ヒラレテ吉

野本川内ニ堆積スル所ノ石質洲渚ニ相對ス

毛田谷、毛田谷ハ同名ノ村内ニ在リ長二里ノ小溪流ナリ

其狹少ナル川床ハ深ク断岸、下ニ通シ常ニ其中ニ流水ヲ絶

タズ。其水源タル毛田山ハ草木繁茂シテ甚々佳美ナリ

半田川、半田川ハ同名ノ村内ニ流ル長三里半アリ烏帽子山

及奥山ニ其源ヲ發ス。急峻ナル半田川ハ其下流ニ於テ幅凡

ソ十五間余、床地ヲ有シ而シテ凹凸起伏スル廣野ノ地面ヲ

堆積シ深断岸八十間乃至十五間ノ、下ニ通ス。

乾床ナリ。  
砂礫ナリ。  
石の多いやせ地  
カントコロ  
かわいいたところ、  
石質洲渚

石の多いすのながさ

現烏帽子山ではない

※1 烏帽子山

※2 一間

【深谷及び金川谷】深谷と金川谷は、両方とも加茂野山（三加茂町加茂南方の山）より、流れ出て短い溪流を形成している。水はすべて清澄である。

【加茂野山谷（加茂谷川）】加茂野山谷は、長さ三里あつて烏帽子山と西野山下部の水はすべてこの谷に流れる。山地の草木の生育はほどほどに良い。流れの下方に石の多いやせ地で幅二〇間<sup>※2</sup>の水のない河床がある。その少し上流から水を引き、三か村の田圃に灌漑用水を供している。

【山口谷（山口谷川）】中ノ庄村（三加茂町中庄）にある。その長さは二里である。中ノ庄村より流れ出る。この溪流は、砂礫になつた河床が幅一〇間ないし一五間あつて、平常は涸れている。合流地点は左側（北）の川内谷（三野町河内谷川）より押し流されて吉野川本流中に堆積した礫質の洲渚に向き合つた所である。

【毛田谷】毛田谷は、同じ名の村（三加茂町毛田）にあつて、長さ二里の小溪流である。その狭い河床は深く、崖の下を流れて水は絶えることがない。その水源でもある毛田山は草木が繁茂して甚だ美しい。

【半田川】半田川は、同じ名の村（半田町）にあつて、その長さは三里半である。<sup>※4</sup>烏帽子山と奥山にその源を発する。急峻な半田川は、その下流において幅約一五間余りの河床を有する。そうして凹凸のある平地を押し開き、また一〇間から一五間の深い断崖の下を流れる。

※3 毛田谷  
現在の猪ノ谷川  
白滝山周辺の山。

※1 烏帽子山  
現烏帽子山ではない

※2 一間  
約一・八メートル

露濕ノ季ハ流勢頗熾ナリ旱魃ノ時モ猶之ニ流水ヲ餘セリ。

水源ノ諸山ハ草木盛ニ繁生ス

貞光川、貞光川ハ同名ノ村ニ在リ長十里アリ小劍山及一字山ヨリ出ツ。又之ニ會スル所ノ左側ノ一大支川ハ烏帽子山ヨリ出ツ。下流ノ十八町間ハ平地ヲ流通シ川床ノ廣六十町アリ砂礫ニ成レリ。山地ニ草木ノ繁茂已ニ較可ナリト虽凡自然ノ浸蝕欠崩アリ障碍ヲ礫スベキ物質多少ヲ流ス。此方角ニ於テモ亦高峻ニシテ且頃斜スル山辺ニ就キ施スニ切一畠耕作ヲ以テス。流床頗廣シト虽ニ旱季ハ僅ニ廣ニ三間ノ流水ヲ餘セリ。

太田谷、太田谷ハ同名ノ村内ニ在リ長僅ニ十七丁アリ之亦幾許カノ石礫ヲ流出ス

穴吹川、穴吹川ハ岩津村ヨリ上流穴吹村ニ在リ。此川ハ諸支川中最美トスル一ナリ長九里アリ貞光川ニ之ヲ比スルモ尚一段緩流ヲナス。最下流一里ノ間川床ノ廣五十町アリ平地ヨリ低キゴト大低ニ同ナリ。此邊ハ時々舟楫ノ往来ニ適スルコトアリ。天時ニ旱リスト虽多量ノ水ヲ之ニ保テリ故ニ銅山川及フイマレ川ト一般ニ之ヲ渡ルニ必ス船ヲ用エ。

露濕。うゑほす。  
流勢熾。スコモサカ。流の勢が猛烈に早い。

旱季。ケンキ。傾斜  
可ナリ。やや宣しい。

旱季。カシキ。傾斜  
ひでりの季節

雨季には水流は激しく、干ばつ時にもなお水は絶えない。水源となる諸山には草木が繁茂している。

【貞光川】貞光川は同じ名の村（貞光町）にあって、長さは一〇里※2小

剣山と一字山から流れ出す。これに合流する左側の一大支流は烏帽子山から流れてくる。下流の一八町※4の間は平地を流れ、河床の広さは六〇間もあ

り砂礫地になつてゐる。山地には草木の繁茂は比較的に多いとはいへ、自

然の浸蝕崩壊があり、「川の」障害となるような物質（土砂）を多少は流し出す。この方面においても高峻にして傾斜のきつい山地において切畑（焼畑）耕作を行つてゐる。河床は大変広いが干季にはわずかに幅二〇三間の流水があるだけである。

【太田谷（太田川）】太田谷は同名の村（貞光町太田）にあって、長さはわずかに一七町である。ここもまたいくらかの砂礫を流出させてゐる。

【穴吹川】穴吹川は岩津村（阿波町岩津）より上流の穴吹村（穴吹町穴吹）にある。この川は吉野川の諸支流の中で最も美しい川の一つである。長さは九里ある。貞光川に比べても、なお一段と緩やかである。最下流一里の間は、河床の広さ五〇間あり、平地より大体二間ほど低い所を流れている。この辺は舟の往来に適する。日照り続祺といつても多量の水を保つてゐる。このため銅山川・祖谷川とともにこの川を渡るときは必ず舟を用いる。

※1 小剣山  
丸笠山か  
※2 一字山  
一字村西南の山地の総称  
※3 烏帽子山  
矢筈山か  
※4 一町  
約一一〇メートル

穴吹川最上流ニヘル所ノ一支部ハ劍山ヨリ出テ、夫ヨリ下流ニ於テ右側ヨリ投スルモノハカキウチ山・中津山・カウツ山ニ其水源ヲ發シ又左側ヨリ東ルモノハ半平山及梶山ヨリ出ツ沿川ノ地方ニハ轡々トシテ佳美ナル山林モ前々看ル所ニシテ總シテ艸木ノ生育頗ル盛ナルヲ視ル

螢川・螢川ハ岩津村ノ下方ニ於テ吉野本流ニヘル川田

カタ

峯田・種野ノ諸山ヨリ出テ來ル。主トスル流線長凡ソ四

里アリ両側ニ數多ノ支流ヲ有ス。草木ハ水源ノ地ニ盛ンニ繁茂スルノ故ニ由リ川中帶ニ流水ヲ絶タズ。

流地落差ノ大ナルヲ以テ繁雨ノ季ニ流勢最猛烈ニシテ半田

川ノ漲流モ猶一歩ヲ譲ツルカ如シ・山地ニ畠爾アレバ所々

自然ニ欠崩スル力為ニ多量物質ノ漂流アリ螢川ヨリ下流ニ

至レハ長六里ニ亘ル高山脈アリ是レ點螢川ノ發地ト吉野

幹流石川ノ低地トヲ分劃スル所ノ者ナリ。此山向ヨリ流出

スル些少ノ溪水ハ概シテ山下ノ平地ニ吸收セラル、者ナリ

ト虽ニ次ニ説カントスル所ノ一川ハ其例ニ非ラズ

イノ川・イノ山ヨリ出ツル一小川トスルイノ川ハ第十村

ヨリ下方ニ於テ別宮川ニヘル・全川水員過半ノ者ハ平地ヨ

舊々。樹木のしげるさま。

穴吹川最上流に流入する一支部は劍山より流れて、それより下流において右岸より流れ込むのはカキウチ山・<sup>※1</sup>中津山・カウツ山（高越山）にその水源を発する。また左側より流れ来るのは、<sup>※2</sup>半平山・梶山より流れ出す。川の周辺の地は樹木がよく茂り美しい山林も見ることがで  
き、草木の生育もすこぶる盛んである。

【螢川（川田川）】螢川は岩津村の下流において吉野川本流に流入する。川田・高越・峰田・種野諸山から流れ出す。主とする流れの長さは、およそ四里である。両側に数多くの支流を持つ。草木は水源の地には盛に繁茂しているので川中の流れは常に絶えない。

流れの落差は大きいので、多雨の季節には流勢は猛烈であつて、半田川の急流もこの川には一步を譲つてゐるようである。（源流の）山地の雷雨により、所どころ自然に崩壊するため、多量の土砂が流出する。螢川の下流あたりから長さ六里にわたる高い山脈が東に延びている。これは鮎喰川の渓谷と吉野川本流沿いの低地等を分ける山脈であり、この山間から流れ出すわずかな谷水はおおむね山の下の平地に浸透するが、次に説明する一つの川だけは例外である。

【イノ川（飯尾川）】飯尾山より流れ出る一小川である。飯尾川は第十村（石井町第十）より下流において別宮川に合流する。この川の水の過半は「流域の」平地において灌漑をしてきた排水からなっている。

※1 中津山

高城山か

※2 半平山

誤記で半平山は右岸に属する。

※3 螢川

現在のほたる川は旧川田川の

河道である。

※4 飯尾山

飯尾川源流（鴨島町）の山

リ灌疏シ末レル喬木ニ成し、鮎喰川、鮎喰川ハ幾ント吉野川ニ並行シテ流し全流長凡十里アリ徳島ヨリ上流鮎ヶ崎（別宮川ニ在リ）ニ於ケル洲嶼ノ間に流出ス。我カ想像ヲ以テ之ヲ觀レハ往時此川ハ流レテハ幡山及城山ノ麓ニ沿ヒ直ニ海ニ達セシナランニ逐時物質ノ流出ヲ以テ川床洲嶼ノ開ニ延長シ而後両岸ノ堤防ヲ設ケタルナラントス

水源ハ中津山ホウジ山、楨山、峯田山ト号クル高山脈ノ中ニ存在ス此等ノ諸山ハ皆劍山ノ分派トスル所ノ者ナリ、總テ諸山ハ草木ニ貪ント云フヘキモノナシ然ルニ鮎喰川ハ砂礫石片ヲ流スモ亦多量ナリ山辺ヨリ凡一里間ノ流尾ニ確乾燥ノ廣床平地ヨリ一段高ク堆昇ス尚其地其川口ノ別宮川内ニ方リ砂礫ヲ積シテ洲渚ヲ成立ス。

夫レ斯ノ如ク大量ノ物質ヲ漂流送出スルコトハ明カニ上地ノ山中ニ必ス看大ノ久崩所黒キヲ保セザルコトヲ示セリ

岬口ニ入りテ山中ニ至レハ鮎喰川ハ長ニ里許ノ函谷ニ流レ寒シテ其涯欠崩ノ痕跡遠近所々ニ班々タルアリ其船戸村ニ於ケル力加キハ石造ノ一壁ヲ築設シテ已ニ幾詩ノ久崩ヲ防ケリ

オウジ  
往時。  
カシ。往の俗字  
カクバク。  
而後。チイチ  
カクバク。  
その長いやせ地  
カクバク。  
なにほど  
の

岬口。  
山と山との間の口  
函谷。  
谷  
カクバク。  
その長いやせ地  
カクバク。  
なにほど  
の

【鮎喰川】鮎喰川はほとんど吉野川に並行して流れしており、全長は約一〇里である。徳島より上流の別宮川にある鬼ヶ崎<sup>※1</sup>の洲嶼の間に流出する。私の推測では、昔この川は八幡山（眉山）及び城山の麓にそつて流れ、直ちに海に入っていたものだらう。次第に土砂の流出により洲嶼の間に成長した。このため川の両岸の堤防を造成したものであろう。

「鮎喰川の」水源は中津山・ホウジ山・楨山・峰田山と名づくる高い山脈の中にある山で、これらの山脈はみんな剣山の連峰の分かれである。すべての山は草木が乏しいということはないが、鮎喰川は砂礫や石片を流すことが多い。山間より一里の間、下流の谷口に石の多いやせ地や広い平地よりも一段高く乾燥した砂礫が堆積している。なお、その他川口の別宮川との合流付近に砂礫ばかりの洲嶼を形成させている。

このように大量の物質（砂礫）を流出し押し流すのは、明らかに上流の山中において著しい崩壊地があることを示している。谷口から山の中に入ると鮎喰川は、長さ二里ばかりの渓谷を流れその奥は予想の如く崩壊の痕跡があちこちに点在している。船戸村（徳島市一宮町船戸）においては、石造りの壁を築いていくらかの崩壊を防いでいる。

※1 鬼ヶ崎  
一九ページ図参照  
※2 ホウジ山  
一一ページのホウシ山と同一

八幡山ノ右側ニ向ヒテ洞開スル所ノ間道アリ八幡川ノ瀬内二通ス

鮎喰川ハ鬼ヶ崎ニ開ケル一口ノ外他ニ又一口ヲナ丁若リハ十一丁上流ニ有シ以テ別宮川ニ通ス此一口ハ多年以前其一方ニ水ノ決潰セシニ創開セリ而シテ今ハ此川ヘ鮎喰ニ旁游大水ヲ下ズノ時タゞ之ヨリ幾分ヲ浸スノミ・本年六月下旬ノ如ク別宮川ノ水ノミ高ヤハ右両川口・何レヨリモ鮎喰ノ水ヲ泄スナシ其水ハ更ニ路ヲ徳島市街ニ取リ田宮津田ノ二川ヲ傳フテ海ニ疏クヘ畠岡ヲ看ラルヘシ)

トウカイ  
洞開スル。ひらはいる。

山の向

ソウカイ  
創開。はじめてひらいた。

ボウイ  
泊。水が盛んに流れること

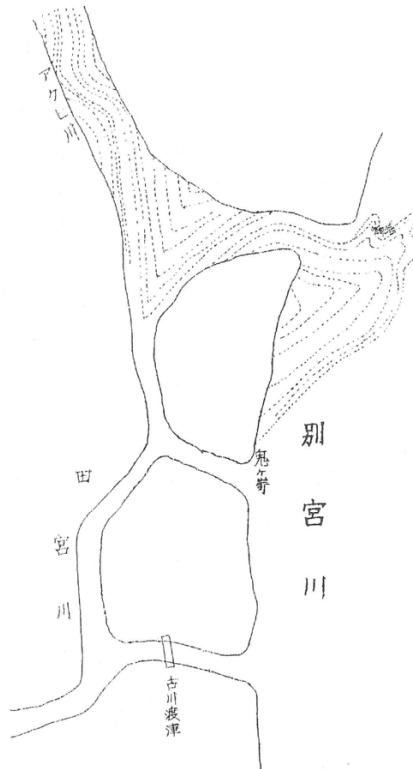
八幡山（眉山）の右側に向かって切り開いた<sup>※1</sup>間道（抜け道）があり、（鮎喰川方向から）八幡川（園瀬川）の谷間に通じている。

鮎喰川は、鬼ヶ崎に合流する出口の外に、もう一つの出口が一〇町か一一町（別宮川の）上流にあって別宮川に合流している。この合流点は、かなり以前に大水によって決壊して開いたものである。今この出口は大水の時に少し流れるだけである。今年（明治十七年）六月下旬のように、別宮川の水位だけが高い時は、両川口から鮎喰川の水を排水することはできず、その水は更に徳島市街を通り田宮川、津田川（新町川）の両河川を経て海に流れ出る。（略図参照）

※1 間道  
地蔵越えか

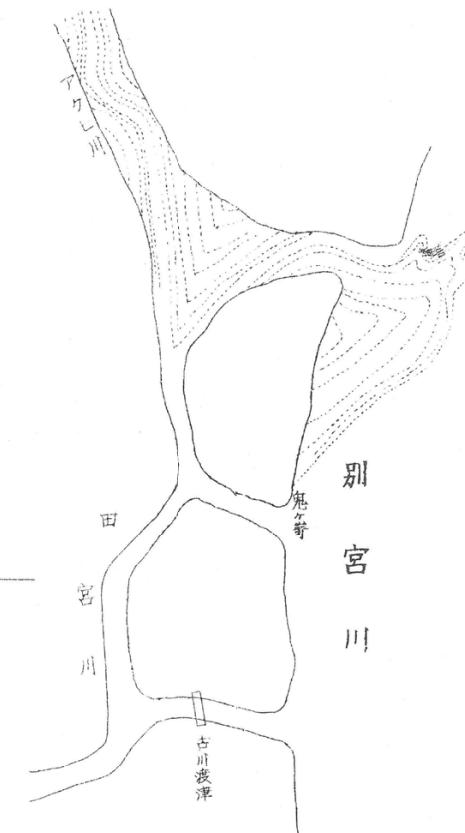
鮎喰川より下流の平地には、城山の上流より津田川に流入する二川がある。八幡山（眉山）の北斜面にしたたる雨水は集まつて、この川の一つに注いでいる。

さらにまた徳島の南には、八幡（園瀬）、タダラ（多々羅）、桂（勝浦）の三川がある。この三川は皆その水源が吉野川流域の外にあるが、津田の地において吉野川の河口洲嶼の間に合流して互いに通じ合っている。



- 19 -

鮎喰川ヨリ下方ニ於ケルノ平地ニハ城山ノ上方ヨリ津田川ニ投スル所ニ二川アリ。八幡山ノ北面斜阪ニ淋漓スル雨水ハ集リテ此ニ川ノ一二灌ク更ニ又徳島ノ南ニ方リハ蟹、タダラ社ノ三川アリ三川皆其水源ヲ吉野川流域ノ外ニ有スト張寒田ノ地ニテ各々吉野川



- 19 -

洲尾洲嶼ノ間ニ相會シ以テ互ニ脈絡ヲ通ス、就中桂川ヲ最大トシ且確害トナルヘキ危険ノ流出モ亦數多トス津田港ノ水利ハ己ニ之ヲ為ニ防害セラル、所ノモナドリ、

御詰<sup>ミヤラク</sup>至に重巻<sup>ミタマツ</sup>をす  
就中。殊に。

### 沿川ノ平地、及び川床ノ事

遠カニ上流ヨリ池田村ニ至ル間ニ於ケルお野川の兩岸草木鬱々<sup>ソクテ</sup>ノ間ニ通シ或ハ岩壁等一ト起立、間カ過<sup>オカシ</sup>き巨岩ニ成レルノ壁ヲ礎工各種ノ景<sup>シテ</sup>所々ニ發ス。此部分ハ川面ノ頃斜頗ル太ニシテ且頃斜ノ緩急一差<sup>セス</sup>岩塊粗砾<sup>ラ</sup>以テ造形ス。其所ノ礎洲渚アル方為ニ所々流水ニ階段ノ如<sup>シ</sup>羅<sup>ラ</sup>状ヲ呈ス。毎所礎帶ハ大小急穎<sup>ヲ</sup>起シ底面ノ落差一處以上ノ多キニ至テハ低水ノ時僅々數寸ノ深サツ以テ漁ル。急瀬ノ間ニハ數ヶ所モ頃斜微小ニシテ速力ノ衰滅ズル所アリ、但シ栗端<sup>ヲ</sup>ナス而シテ其所ノ如キハ七丈五尺ノ栗キア致ス。礎帶セル洲渚ノ中最大ナルハ「イマレ川」より流出シタル漂着物質ニ成立スル者之ナリ頗ル急流トスルトイマレ川ノ出口ヨリ下流八丁ノ間ニ連續スル所ノ斯大洲渚ハ其質岩塊燧

泰<sup>タケ</sup>ム、上にさし出す。  
クダチ、樹木のしげるさま。  
礎<sup>シヨウ</sup>、礎石。はどんと  
礎<sup>シヨウ</sup>、礎<sup>シヨウ</sup>。本のほりする。  
ソウイ、ソウイ。  
岩<sup>イシ</sup>、イシ。  
礎<sup>シヨウ</sup>、シヨウ。  
洲<sup>シマ</sup>、シマ。  
渚<sup>シマツ</sup>、シマツ。  
スコボルト、スコボルト。  
礎<sup>シヨウ</sup>、シヨウ。  
洲<sup>シマ</sup>、シマ。  
灘<sup>シマツ</sup>、シマツ。  
ソウイ、ソウイ。  
岩<sup>イシ</sup>、イシ。  
灘<sup>シマツ</sup>、シマツ。  
スコボルト、スコボルト。  
洲<sup>シマ</sup>、シマ。  
灘<sup>シマツ</sup>、シマツ。  
ソウイ、ソウイ。  
岩<sup>イシ</sup>、イシ。  
灘<sup>シマツ</sup>、シマツ。  
スコボルト、スコボルト。

中でも桂川は最大で（河川の）障害となる物質（土砂）の流出も最も多い。津田港の水路もこのために妨げられているのである。

### 沿川の平地、及び川（河）床のこと

遙か上流より池田村（池田町池田）に至る間の吉野川は草木が鬱蒼<sup>ソクテ</sup>と繁茂した間を通り、または川岸がほとんど垂直にそそり立った間を通り、巨岩からなる谷を流れ、各種の景観を生じている。この辺りは水面の勾配がすこぶる大きく、その上勾配の緩急が一定でない。岩塊と荒い礫岩からなる「礎洲渚」があるために、所どころ流水が階段式の瀬状をなす。各所の礎帶は、大小の急瀬に統き、瀬の落差が一間以上に達するが、低水の時にはわずかに数寸の深さである。急な瀬の間には、何か所も傾斜微小で流速が落ちる所がある。しかし深い淵を形成するところは、深さ七丈五尺程のものもある。

礎<sup>シヨウ</sup>滞した洲渚のうちで最も大きいのは、祖谷川から流れ出た漂着物質（土砂）によって形成されたものである。大変な急流である祖谷川の合流点から下流八町の間に連続する大きな洲渚は、その岩質は燧石岩塊。

※1 矶<sup>シヨウ</sup>帶

妨<sup>シテ</sup>被<sup>ヒテ</sup>れて滯<sup>シテ</sup>ること

※2 一丈<sup>二尺</sup>約三メートル